

DYNAMIC LIGHT

written by HADEYA and DEUS EXMACHINA

1

美千代が緊急病棟に運ばれたのは、八分前。美千代の顔は真っ赤に腫れている。全身には切り傷も無数にある。重症に違いない。担当医は治療方針を悩んでいた。治療も何も原因不明なのだから対処療法しかないが。それにしても、このケロイド状の腫れは何だ……。

治療には五時間かかった。集中治療室に運ばれたのは、それからだ。ウイルスでない事は判明している。事件性を視野に入れ、二人の刑事が院内を訪れていた。

担当医と看護婦が美千代の様子を見にICUに入った。異臭……腐敗臭が充満している。

不審に思い、担当医はカーテンを捲った。美千代の背中は二つに割れ、ポツカリ穴が開いている。死んでいた。

「こ、これは……」

死体に接近し、担当医は背中……患部に触れてみた。粘着質の液体が付着している。

ポタリ、と看護婦が手にしているカルテに粘着質の液体が落ちた。上を見た。天井には得体の知れない〈巣〉があった。これまで見た事もない巣のようなモノが。担当医は告げた。

「出よう……さあ早く！」

担当医はICUから出ようとした。ドアノブを掴む。

「熱！」

慌てて、手を引っ込めた。ノブは真っ赤に染まり、火傷する程、熱かった。その時、スマホの緊急地震速報が鳴った。不気味なサウンドが不条理を一層、煽る。

「ど、どうしますか？」

看護婦が問うた。担当医はナースコールを押した。その時、大地が揺れた。地震——大きい。立っているのが、やっとだった。天井のスプリンクラーが水を撒く。二人はビショ濡れになった。

目の前を何か横切った。透明な何か、が。何かは目にも止まらぬスピードで透明な刃物を担当医の首に突き立てた。

「きゃあああ！」

首から血を撒き散らしながら担当医が倒れた。刃物を持った透明な何か看護婦……私の元に接近して来る。揺れはまだ収まらない。

ドアが蹴破られた。室内に男——飯島俊平が飛び込み、同時に叫んだ。

「逃げて！」

私は部屋の外に飛び出た。走りながら問うた。

「一体、何が起きてるの！」

「分からないんです！何か異常事態が起きています！」

二人は病院の外へ出た。同時に背後でズンと言う音と共に病院が倒壊した。それでもなお、二人は走り続けている。マンホールが吹き飛び、そこかしこで水柱が吹き出た。外には大勢の人が倒れ、ピクピク痙攣している。何が起きたか分からない。二人は無我夢中で走り続けた。

立ち止まった。息を切らせながら飯島は言った。

「何かトンデモない事が起きています……理解できない何かが……」

「私、怖い……怖くて怖くて……どうにかなりそう……」

「大丈夫、私が付いてます。飯島俊平と申します」

「山内美加と申します……怖くて、怖くて……」

美加はその場に屈み込んだ。飯島が側に屈んで力強く告げる。

「大丈夫、俺が付いてます。共に逃げましょう」

美加は飯島に抱き付いた。飯島も美加を抱いた。弱々しい声で美加は尋ねた。

「飯島さん……私を守ってくれますか？」

飯島の回答は頼もしかった。

「守ります。全力で山内さんを守ると約束します」

そう言って、飯島は美加にキスをした。美加の肩は小刻みに震えていた。飯島は美加を立たせると、手を握った。

二人はその場から立ち去る為、ヨロヨロと歩き始めた。

2

「僕たちだけの秘密だよ」

そう言って、年端も行かぬ池川孝は小さな〈箱〉を見せた。埃を被った茶色い箱だった。少女——武田佐和は興味津々と言った面持ちで箱を見ている。

「この箱に話すと、箱も話すんだ」

孝は箱に話し掛けた。付近に置かれたトランジスタラジオから無機質な声ができる——この箱を決して開けてはならない。

「ほらね？」

孝は自信满满だった。ここは地下室。ここにいる事は両親には内緒だった。

「箱を開けると、何が起こるの？」

佐和が尋ねる。孝は答えた。

「開けてみる？」

「うん」

孝は箱を開けた。それは〈パンドラの箱〉だった。箱の中から災いがモクモクと立ち昇る。そして世の中で異変が起きた、と言う訳だ。

「……何も起こらないけど」

佐和は言った。孝が周囲を見る。確かに何も起きていない。孝は箱に語り掛けた。応答はなかった。

数日後、異変が起きた。孝と佐和は地下室にいた。他愛ない会話をしている。

孝は佐和が好きだった。佐和も孝が好きだった。二人でいると気分が高揚する。

「焦げ臭くない？」

唐突に佐和が言った。孝が匂いを嗅ぐ。確かに焦げ臭い。孝は階段を上がり、一階の様子を見た。玄関が燃えていた。

「火事だ！」

孝が叫んだ。佐和も一階へやって来る。瞬く間に炎は広がった。二人は居間へ避難した。そこで見たモノは……炎の姿をした人間。炎人間は何かをしている。

炎人間が作業を中断し、二人を見た。

「箱を開けたな？」

炎人間は問うた。孝は「うん」と答えた。炎人間は言った。

「人類は報いを受ける。傲慢の報いを」

「傲慢って？」

「それを傲慢って、言うんだ」

炎人間がカーテンを掴む。カーテンに引火した。炎が広がって行く。二人は逃げた。だが逃げ道がない。二人は地下室へ避難した。佐和は泣き出した。

「だ、大丈夫？ 佐和ちゃん」

佐和は一層、激しく泣き出した。黒煙が地下室に侵入して来た。二人は咳き込んだ。一酸化炭素中毒——二人は意識を失った。

3

異変が起きたのは車を運転している時。踏んでもいないアクセルが加速した時だ。

「ちょ、ちょっと……加速してない？」

運転席の斉藤真弓は慌ててブレーキペダルを踏んだ。助手席の亭主、大野雄二が叫ぶ。

「ブレーキ、ブレーキ！」

「ブレーキが効かない！」

車がグングン加速した。そして急旋回しながら建物に突っ込んだ。

「無事か！」

雄二が叫んだ。無事みたい——真弓はそう答え、シートベルトを外そうとした。外れない。

「……シートベルトが外れない」

「俺も。変だな」

シートベルトが外れた。その先端が暴れた。先端はフロントガラスを貫通し、なお闇雲に暴れている。

「きゃあ！」

「ど、どうなってんだ！」

シートベルトはなお暴れている。ドアを開けた。頭を抱え、二人は車外へ転げ落ちた。外では道行く車が玉突き衝突を繰り返していた。

「何が起きてるの！」

「分からない！ 逃げよう！」

二人は走った。背後で爆発が起きた。玉突き衝突した車が次々と爆発して行く。二人は逃げた。前方に巨大な看板が落下し、けたたましい轟音が鳴り響いた。

「ど、どうする！」

雄二は付近を見回した。マンホールが半分、開いていた。

「この中に入ろう！」

「だって、マンホールだよ！」

「ここより安全だ！ 早く入って！」

雄二がマンホールを外し、二人はハシゴを伝って下へ潜った。中は人工照明があるものの薄暗い。そして思っているより広い。マンホールの外からドカンドカンと轟音がする。

「……どうする？」

「暫く、ここで待機しよう」

「何が起きてるの？」

「分からない。まるで分からない」

轟音が収まった。雄二がハシゴを登り、外の様子を見た。そこには巨大サソリがノソノソ歩いていた。

「どうだった？」

「……ヤバい、かなり」

「どうすんの？」

「どうしようもないだろう」

打開策はない。二人はマンホールの中で抱き合い、途方に暮れていた。

4

俺と真弓は結婚して五年になる。大学からの付き合いで、付き合いで1年で結婚した。22の時だ。

俺はSE……システム・エンジニアで真弓は専業主婦。子供はいない。住宅ローンを抱える、どこにでもいる普通の夫婦だ。

真弓は気が強く、俺は気が弱い。喧嘩をしても謝るのは、いつだって俺だ。

来週の食料を買いに行こうとして車に乗った。四十五分ほど前の話だ。真弓が運転していたのは俺が荷物持ちだからだ。

私たちは結婚して五年目。大学の時、合コンで知り合った。メル友になって食事をするようになって、告白。お約束のコースを歩んで結婚に至った訳だ。子供はいない。欲しいとも思わない。だからセックスの時はコンドームを欠かさない。

悩みは家計。主人の収入は少なくないが、多くもない。もっと裕福な生活がしたい。強いて言えば、それが悩みだ。今日は食料を買いに行く予定だった。ところが、この有り様。この後、どうなるかは分からない。一体、何が起きたのだろう。

「一体、何が起きたの？」

私は尋ねた。

「世界の終わりかな」

スマホを弄りながら雄ちゃんが答えた。当分、ここから出る訳には行かない。かと言って、いつまでもここにいる訳には行かない。私は提案した。

「外、出してみる？」

「バカ言え」

「一か八か」

「あり得ないだろう。サソリに襲われるのが関の山だ」

「でも——」

雄ちゃんのスマホを遮り、私は提案を続けた。

「——逃げちゃえば、こっちのモンじゃない？」

「.....ヤバイだろう」

「逃げよ。狭い所、私、苦手なの」

雄ちゃんは溜息を吐いた。

「私から行く」

言うより早く行動に出た。ハシゴを登る。マンホールの隙間から外を覗く。サソリは後ろを向いている隙に外に出た。続けて雄ちゃんが出る。二人で上手く逃げ果せた。

「これから、どうする？」

私が尋ねる。雄ちゃんの提案は、建物の中は袋の中のネズミだから外を徘徊しようと言う作戦だった。私も賛同した。

そして私たちは川原にやって来た。ここなら私たちを襲うモノがないからだ。

5

意識が覚醒した。孝はシンドそうに上半身を起こすと、隣で倒れている佐和を揺さぶった。

「佐和ちゃん.....佐和ちゃん！」

佐和が呻き声を上げながら意識を取り戻した。孝と目が合う。周囲は壁が黒くなっている以外、何の変哲もなかった。住居が倒壊し、酸素が一気に流れ込んだのだ。そこは地下室だから被害なく、奇跡的に一命を取り留めた訳だ。

「大丈夫？」

孝が心配する。大丈夫、と佐和は答えた。二人は地下室から出る事にした。

街を彷徨う。至る所で炎が上がり、住居が燃えている。知らず知らずの内に二人は手を繋いでいた。

「うちに帰らなきゃ。ママが心配する」

「駄目だよ、危ないよ」

「でもママが——」

「公園に行こう。公園なら安全だ」

公園に着くと死体の山だった。二人はブランコに座った。佐和が言う。

「.....みんな、死んじゃったね」

「うん。うち、燃えちゃった。どうしよう.....」

孝が俯く。佐和はブランコから降り、孝の前にやって来て、頬にキスした。

「魔法のお呪い」

「ありがと。僕、佐和ちゃんが好き」

「私も孝が好き」

「結婚する？」

「うん」

顔きながら佐和は微笑んだ。キュートな笑顔で。今の孝にとって、佐和の笑顔が唯一の救いだった。それは地獄に射し込む一筋の光だった。

ふと孝は上を見た。上空に黒い点が見える。指を差しながら佐和に告げる。

「あれ、なんだろう？」

佐和は上空を見た。そこには黒い影のようなモノが蠢いている。影ではない。人だった。正確には悪魔だった。悪魔の大軍が地球に押し寄せようとしている。

孝は立ち上がった。

「警察に行こう」

二人は足早にその場を立ち去った。第二波が……本当の闘いが始まろうとしていた。同時に二人のトゥルーロマンスが始まりつつあった。

6

「先立つモノは武器です」

言い出したのは飯島だった。確かにこの状況では武器が必要だ。美加も同感だった。二人は警察署へやって来た。拳銃を得る為に。

署内は死体の山。みんな、口から泡を吹いている。神経ガスに特有の症状だ——美加は思った。

飯島が倒れている警官から拳銃を盗んだ。一丁を自分に、一丁を美加に手渡す。

「どうやって撃つんですか？」

「引き金を引くだけです。安全装置は外してあります」

飯島が窓際に移動し、サンバイザーの隙間から周囲を目視する。上空に黒い影が見えた。目を懲らした。

「……話が見えて来た」

「どう言う事ですか？」

飯島が後ろを向き、美加を見た。飯島の口調は冷静だった。

「サタンですよ」

「サタンって、悪魔の？」

「そうです、このゲームの黒幕はサタン。そして上空にサタンの軍勢が押し寄せている」

「本当ですか？」

「ええ、確認しますか？」

美加は窓際に移動した。サンバイザーの隙間から上空を見る。飯島の話は本当だった。

「ど、どうします？」

美加は問うた。関節を鳴らしながら飯島は答えた。

「ここで応戦しましょう。ヤバくなったら——」

「ヤバくなったら？」

「……ご判断は任せます。我々にはピストルがあります」

飯島が移動した。棚を倒し、盾にする。デスクも横に倒した。

「ここで闘うんですか？」

「それしかありません。こちらへ」

デスクを盾にして飯島が屈む。言われるがまま、美加は飯島の隣へ屈んだ。飯島は伝えた。

「あの入り口から悪魔は侵入して来ます。弾はたくさんあります。撃ちまくって下さい」

「は、はい」

「これ渡しておきます」

そう言って飯島は一発の銃弾を渡し、告げた。

「自殺用の弾丸です」

無言で美加は弾丸を受け取った。それから美加は飯島から拳銃の操作を教わった。リロードの方法やジャム——弾詰まりの回避方法を。

静寂が漂う。飯島は煙草に火を点け、白い煙を吐きながら言った。

「間もなく闘いが始まります」

「……ですね」

「さっきは急にすいませんでした。気が動転して」

「いいんです。嫌じゃなかったですから」

「良かった」

「飯島さんって、お仕事は何をされているんですか？」

「聞かないで下さい」

「分かりました」

飯島は短くなった煙草を床で潰した。拳銃を手に美加は心臓の高鳴りを抑えられずにいた。今まさに決戦が始まろうとしていた。

7

足音がする。悪魔——既に署内に侵入したのだ。飯島は……俺は拳銃の弾倉を回した。撃鉄を起こし、銃口を入りに向ける。

悪魔がノソノソ現れた。銃声がツン裂いた。美加は銃を構えた。悪魔が叫んだ。日本語だった。

「どこにいる！」

俺は天井に向け、一発、撃った。目にも止まらぬスピードで悪魔が目の前にやって来た。美加が銃を撃った。弾丸は悪魔の肉体を貫通した。が、悪魔はビクともしない。

悪魔が美加の拳銃を引ったくり、口笛を鳴らした。悪魔が集まって来る。しかし、いつまで経っても攻撃しない。

何かが可笑的い。

美加は思った。飯島は煙草に火を点けた。悪魔が飯島に尋ねる。

「飯島俊平さん、だな？」

「そうだ。悪い星じゃないだろう？」

状況が分からない——美加は困惑していた。悪魔が飯島に尋ねる。

「お隣さんが、山内美加さんか？」

「ああ」

美加は飯島を見た。どう言う事か尋ねた。飯島は答えた。

「俺は人類を売ったんだ。サタンに」

「売ったって、どう言う……」

「俺はサタンと取り引きが出来るんだ。何故なら——」

飯島の表情が豹変する——悪魔の表情に。

「——俺がサタンだから、だ」

そう言って飯島は立ち上がった。美加を優しく立たせる。何が何だか分からない。

「もっと詳しく説明しよう。ある日、サタンはこの肉体、俺の肉体を乗っ取った。目的は一つ。美加さん、あんた、だ」

「わ、私？」

「あんたの娘さん、神の子なんだ」

「娘……何の事ですか？」

「神があんたの別れた主人に憑依して娘さんが生まれたのさ。あんたはそうとは知らずに生きて来た。俺たちも、な。そしてサタンは神と敵対関係にある」

美加は目をパチクリさせた。娘——佐和が神の子だとでも言うのか。

「そう言う事。あんたと武田佐和さんには俺たちの世界で最高の待遇を揃えた」

飯島……サタンは手を差し伸べ、言った。

「俺たちと手を組むか？」

無言で美加は握手を交わした。契約成立。悪魔と取り引きを交わした。後戻りは出来ない。

「娘はどうなるんですか？」

「神の人質になる。だが俺達は人質には一切、危害をくわえない。約束する。神がゴッドランドのゲイトを開けたら……」

「開けたら？」

「ゴッド・ランドは俺たちのモノとなり、俺たちが神になる」

美加は唾を呑んだ。

「娘は無事ですか？」

「無事だ。俺たちの部下、炎が助けた」

悪魔が口を挟んだ——ここを活動拠点にするのか？ サタンは答えた。

「そうだ。ここで神の連絡を待つ」

サタンは煙草を指で弾いた。短くなった煙草を遠くへ飛ばす。

「もうすぐ、佐和さんがここに来る。ボーイフレンドと一緒に」

「娘にボーイフレンドはいません」

美加はきっぱりと答えた。サタンは首を振り、告げた。

「ところがいるんだ。俺の部下、小悪魔がボーイフレンドなんだ」

何かも仕組まれている——美加は悟った。娘を救わなければ、その為には……従うしか方法がなかった。

8

チヨロイ仕事だ——孝は思った。佐和をその気にさせて警察署へ連れて行けば良い。それで俺は幹部悪魔に昇進だ。

「孝、何を考えてるの？」

「何も」

「今、ニヤニヤしてた」

「そうそう、今夜の晩ご飯は何かなって。ハンバーグを思い出したら、ついニヤニヤしちゃって。そんな事より急ごう」

孝は佐和の腕を引っ張った。

「痛い！」

佐和が言った。しまった、ちょっと力が強く入った。孝は思った。

「御免、大丈夫？」

「どうしたの、孝！何か変！」

「変じゃない。ちっとも変じゃない。さあ警察へ急ごう」

佐和が腕を振り解いた。

「私、どこにも行かない！」

佐和は泣き出した。孝は動揺した。このままでは幹部悪魔に出世できない。手を打つ必要がある。あの手しかない。

「佐和ちゃん、上を見て！悪魔が迫ってる！」

「私、どこにも行かないから！」

やれやれ。孝は黒い吐息を吐いた。吐息を吸引した佐和が倒れる。倒れそうになったところをキャッチした。商品……人質に傷が付いたら困る。

「さて」

孝は佐和を担いだ。そのまま上空へ飛ぶ。警察署まで、こうして飛んで行くしかない。力仕事だが出世の為には手段を選んでいない場合ではない。

孝は飛んだ。飛びながらプランを反芻する。予定では警察署に佐和の母——山内美加が待機している筈。俺は佐和をサタンの元へ連れて行き、神がコンタクトを取る。これだけ地球で派手に暴れれば、連絡を取るだろう。ゴッドランドのゲイトが開いたら美加と佐和は用済みだ。殺害されるに違いない。だが、それは俺のミッションではない。

そうこう考えている内に警察署が見えて来た。着陸態勢に入る。飛行したまま、佐和を担いだまま警察署へ入った。勿論、顔パスだ。

署内に入ると、付近の悪魔にサタンの居場所を尋ねた。警察署は悪魔がピッシリ守っている。厳戒態勢だ。そこで佐和が意識を取り戻した。止むを得ず、着陸した。

「佐和！」

美加が佐和の元に駆け寄った。

「ママ！」

二人は抱き合い、無事を確認め合った。

「ママ、孝が……孝が……」

美加と目が合った。美加は俺を睨んでいる。面倒は御免だ。俺はそのままサタンの元へ逃げた。サタンに告げる。

「ミッション完了ですが？」

「ご苦労。下がっていいぞ」

「報酬は？」

「約束は守る」

「幹部悪魔ですか？」

「そう言う事だ」

俺は鼻で笑った。最高の気分だ。一方、佐和は泣いていた。甲高い鳴き声が室内に響き渡る。俺はその場を後にした。他の悪魔とハイタッチを交わす。ある飲料水のキャッチフレーズが頭に浮かんだ。

スカッと爽やかコカ・ブラック！ カフェイン2倍、糖分ゼロ！

俺は他の悪魔から貰った煙草に火を点けた。年端も行かぬ少年だが、煙草を吸おう。俺は口から白い煙の輪を吐き出した。見事な輪だった。

9

真弓と雄二は川原を走っていた。上空から悪魔が降って来たからだ。隠れる場所が必要だ。二人は公園にやって来た。死体を跨ぎ、遊具の穴の中に入る。ここに隠れる事に決めた。

真弓が声を潜め、言った。

「ど、どうする？」

「どうしよう……」

その時、悪魔が公園に現れた。何かを探しているようだ。二人は息を潜めた。

「そこにいるのは分かってるぞ」

悪魔の声がした。雄二は声を荒げた。

「取り引きがしたい！」

悪魔が穴の前に迫る。遊具の穴から悪魔の足が見えた。太く筋肉隆々とした足が。雄二は続けた。

「俺は機密を持っている！ 人類の存亡に関わる機密だ！ それを渡すから命だけは助けて欲しい！」

「なら、出て来い」

雄二は手で真弓にそこにいるよう指示を出した。自分だけが穴から出る。悪魔が尋ねた。

「どんな機密だ？」

「それは——」

雄二が悪魔に飛び掛かった。目にも止まらぬスピードで悪魔の首をヘシ折った。

「——神が地球に侵入したって、機密さ」

真弓が遊具から出て来た。先程とは顔立ちが違う。目付きが鋭くなっている。雄二は真弓に告げた。

「サタンは警察署にいる」

「どう言う段取り？」

雄二は少し考えてから発言した。

「正面から殴り込み作戦、だな」

「了解」

二人は歩き始めた。その姿が忽然と消滅した。テレポート——警察署の前へやって来た。大勢の悪魔が待ち構えている。

雄二は入り口に走った。悪魔が雄二に飛び掛かる。雄二は泣きながら叫んだ。

「命だけは助けて下さい！ 私は人類存亡の機密を持っています！ どうか取り引きを！」

悪魔は雄二を立たせた。雄二は署内へ連れて行かれた。駐車場からその光景を目視し、真弓は別行動を取った。真弓は足早に裏口へ向かっていた。

10

雄二はサタンの方に連れて来られた。合掌しながらサタンに懇願する。

「私は人類の機密を持っています。受け渡しますので、どうか命だけはお救い下さい」

サタンの目は冷たかった。口調も冷たかった。

「どんな機密だ？」

「最高機密です」

「だから、どんな機密かと聞いている」

「それは……暗殺者があなたを狙っている事を証明する情報です」

サタンの目付きが変わった。

「……お前、何者だ？」

「気付くのが、遅えんだよ」

そう言って、雄二はサタンの足下に手を翳した。神の手刀は悪魔のアキレス腱をも切断する。同時に背後に回り込み、サタンを羽交い締めにした。ピストルをサタンのコメカミに突き付ける。突き付けながら美加と佐和から離れて行く。

室内の悪魔が戦闘態勢に入った。サタンが叫んだ。

「殺れ！ 殺っちまえ！」

悪魔が一斉に飛び掛かった。雄二の強さと言ったら……圧倒的な強さで雄二は悪魔を殲滅した。

サタンが拳銃を拾おうとする。その手を雄二が踏んだ。

「畜生」

雄二を見ながらサタンは呟いた。雄二はサタンの首を引き裂いた。黒い鮮血が美加に飛んだ。

美加が抱きしめている佐和を見る。佐和は雄二を見ている。雄二は告げた——あなた方を助けに来ました。美加は問うた——あなたは誰ですか？ 雄二は手を差し伸べ、答えた。

「エグザイル。幹部ゴッド、直属の部下。サタン暗殺、並びに悪魔掃討の命を受けています」

11

佐和は美加に手を取られ、歩いている。二人は歩きながらエグザイルから状況説明を受けていた。

「つまり他の惑星へ向かうって事ですか？」

美加は確認した。エグザイルは首を振った。

「別の惑星ではありません。説明が難しいのですが、ゴッドランドと言う異世界です」

「どんな世界ですか？」

「地球よりは生き易いと思いますよ。経済も犯罪もありませんし」

「行きます。ゴッドランドに行きます」

「では、こちらへ」

エグザイルは案内しながら警察署を出た。裏口に回る。悪魔の死体がそこら中に転がっていた。真弓———ザイオンが倒したに違いない。

裏口に付くとザイオンがゲイトを開き、待っていた。このゲイトの向こうにゴッドランドがあると言う。

一件落着だと思った。ハッピーエンドだと思った。この後、ストーリーは番狂わせを描き、誰も予想しないエクストリームな結末を迎えるのだ。

二人はゲイトを潜った。エグザイルとザイオンが後に続いた。ゲイトが閉ざす。何事もなかったかのように周囲は静まりかえっていた。

12

一体、何が起こるのか。実は美加が別の悪魔だった、とか。あるいはハリウッド映画みたクウェルメイドなハッピーエンドが待っているとか。

どちらも違う。事前に言うておくが、このエンディングは強烈だぜ。

真相はこうだ———佐和は神の〈隠し子〉なのだ。だからこそ地球でコソコソ生活を送っていた訳だ。そもそも何故、神は美加の元主人に憑依したのか。財産争い、だ。神の莫大な遺産は神の子に分配される事になっている。しかし神と彼の妻の間でイザコザが起きた。神は一計を案じた———地球で隠し子を作ろう。たまたま美加の主人に憑依した。相手は誰でも良かった。

隠し子を設けたのには理由がある。実の子供たち三人に財産を与えない事。遺産は隠し子に与え、隠し子を意のままに操る打算。妻と実の子三人には申し訳ないが、死んで貰う。誰が殺すか———美加だ。美加は神のスパイだ。美加は神々を欺き、地球で看護婦として生きて来た。全てはこの汚れた計画の為に。

予定通り美加が妻と実の子、三人を殺害した。神殺し、ここまでは計画通りだ。ここからが計画通りでなくなる。美加が裏切る事は出来ない。そんな事したらゴッドランドから永久追放されるからだ。だが美加は秘密裏に行動していた。宇宙人と取引を交わしたのだ。宇宙人への見返りはゴッドランド入国の暗証番号。代償として美加と佐和は宇宙人としての市民権を得る。

「そう言う事」

美加は神に告げた。どこまでも冷たい口調だった。宇宙人がゴッドランドの中に流れ込む。神が屈辱に震えていた。震えながら神は宇宙人に短剣で刺された。美加は鼻で笑った。

宇宙人のリーダーと思わしき者が美加に接近する。

「上手く行ったな？」

美加はタバコをくわえ、火を点けた。白い煙を吐き出し、言った。

「まだ、よ」

「……何？」

「まだ、ゲームは終わりじゃない」

その時、大地が揺れた。そうとも、こうでなくっちゃ。最後はエクストリームでなければならない。

宇宙人は美加に迫った。

「ど、どう言う事だ？」

瞬時に宇宙人が消えた。ゴッドランドも消えた。地球も宇宙も、何もかもが消えた。美加と佐和だけが残った。何も
ない世界——虚空に。美加も佐和も全裸だった。佐和は美加に尋ねた。

「……ママ、何者なの？」

「ママは、ね。摂理よ。この世界の摂理」

世界は消えた。幻だったのだ、この世界は。佐和が見た世界、佐和が信じた世界、全てが幻だったのだ。

美加がフェイドアウトして行く。佐和は叫んだ——行かないで！

「愛してる」

そう告げて美加は消えた。佐和は泣いた。腹の底から泣き叫んだ。感情が爆発する。そして見た——光を。目も
眩む真っ赤な閃光が脳内を突き抜け、佐和の中で何かが弾けた。同時に性転換が始まった。佐和は女性から男
性へ変身して行った。もはや佐和は佐和ではなかった。本物の神だった。虚空に浮かぶ神、大世界の創造主……

。

虚空に神が誕生した。ゲームは決着が付いた。

神は全能の力で果てしない虚空を力強くブツ飛んだ。けたたましい雷鳴と共に赤い稲妻が虚空を突き抜ける。真っ
赤な真っ赤な稲妻が、血より赤い稲妻がスパークした。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872